

秋田大会に参加して

－自治体史の立場から－

青森県県民生活文化課史編さんグループ

中野渡一耕

全史料協全国大会には当県史事務局は毎年参加しているが、今年は隣県であり（とは言え、日本海側の交通は非常に不便）、さらに県史編さん終了まで3年を切ったので、編さん終了後の資料保存のあり方等について参考にするため、当課から3人が参加した。

今年度は大会趣旨説明にあるように、開催地が都道府県単位でなく、公文書館施設がない基礎的自治体（市町村）で行われる初めての大会という。秋田県大仙市は平成29年3月のオープンを目指して公文書館整備を行っている。市町村レベルでは東北では初、もちろん青森県にも無いので、この点でも大いに興味を持った。

昭和から平成初めにかけて、自治体史編さんから文書館へ、というのが一つの流れだったと思う。しかし、昨今は新規の箱物建設は難しい。静岡県のように既存の施設を活かし「歴史情報センター」形式で衣替えしているところはある。市町村と県との違いはあるが、

与えられた条件でどのように整備したのか、自治体史編さん後の資料保存のあり方は全史料協でも昔から議論されている内容だが、以上を踏まえて記したい。

巡 見 地元の豪農である池田家の「浜蔵」及び大仙市中仙支所の公文書保存状況を見学。自治体史が終わっても池田家文書のように古文書調査が継続されている。中仙支所は、現在整備中の公文書館が出来るまでの仮置き場といった風情だが、残念ながら公文書館の見学は適わなかった。遠隔地にあるうえ（市中心部から約20キロ）、整備工事中なので仕方ないが、本大会のバックボーンでもあるだけに、ちょっと残念な気はした。

研 修 全史料協の伝統？として、開会行事や記念講演の前に研修が始まる。私は研修C「博物館のない自治体の歴史資料保全活動」に参加。白石市では、昭和62年に市史編さんが終了したが、その後は積極的、継続的な歴史資料の調査や保全を行わなかったため、調査済の資料の散逸、市民の不信感が見られたという。同じく自治体史に関わる者として厳しい指摘である。本の刊行はゴールではなく、地域資源の保存活用のスタートと言えるのだ。



受付（市民会館ロビー）

しかし、編さん終了後に元仙台藩重臣の家から古文書が発見されたことから、白石古文書の会を中心に市民との協働による歴史資料保存活動が実施され、東日本大震災でも威力を発揮した。発表者は「博物館のない自治体」と謙遜？されていたが、白石市は旧城下町であり、市民の間でも資料保存に関する意識は高いのであるまいか。資料保存の重要性は市史も県史も同様だが、「市民との連携」はなかなか県全体では実施しづらい（もちろん、担当者の意識や意欲にもよるのだが）。本県には宮城や茨城のような歴史資料保存のネットワークもなく、むしろ、県内のネットワークづくりなど、県全体をカバーするスケールメリットを生かせる部分はないか、考えさせられた。

翌日は研修E「利用者の視点に立った公文書館」を受講。ここは、大学生に一利用者として自治体に日本海中部地震を題材に歴史公文書の利用申請をさせ、どのように対応するかという調査（実験？）に興味をそそられた。通常の大学の調査でなく、あくまで一般の利用者と横ならびである。結果、全く回答がない自治体もあり、行政刊行物以外の資料（刊行物のもとになった公文書等）を出さない（出せない）自治体も多かった。マスコミや行政の内部利用を除くと、一般市民が歴史公文書

を利用する場面はそれほど多くないと思う。貴重なりポートであった。我々も役所に籍を置く者として、身につまされた。

記念講演 初代公文書管理担当大臣の上川陽子氏の講演。公文書館を通じた「知のインフラ作りが必要」という発想が印象に残った。

大会テーマ研究会 今回は大会が基礎的自治体ということで、報告も全て市町村の担当者だった。大仙市、茨城県常陸大宮市、群馬県中之条町の方が、各自治体における公文書の保存・活用の方法について報告。いずれも市町村では珍しい公文書館施設を持つ、あるいは建設中という共通点を持つ。大仙市と常陸大宮市は単独館（いずれも廃校を活用）、中之条町は博物館と併設である。

大仙市は旧太田町編さん事業で収集した膨大な量の資料保存について市民の声があった。また、トップの意志により、評価選別にあたり3年間公文書の全量保存という思い切った施策を行ない、選別・保管に努めたという点も大きい。白石市同様、資料の整理に市民との連携（市民ボランティアの活用）がうまく行っていると感じた。地域史料（古文書）の全市悉皆調査とは、なかなかできるものでない。



記念講演

廃校を活用した文書館の整備には候補地が二転三転したと担当者が苦労を語られていた。平成の大合併で市域が広大になり、文書館が市役所本庁舎から約20キロという実態に、利便性はどうかと感じた。とはいえ、まずは箱が出来たことで資料保存・公開の体制も整うだろうし、基礎自治体における史資料の保存のモデルケースになりうると思う。

常陸大宮市も茨城県初の公文書館施設という。ここも現市長の選挙公約に公文書保存が掲げられたという点で、トップの意志が大きい。同市には以前から歴史民俗資料館があり、同館の古文書も移管する形で、教育委員会内に文書館が置かれた。廃校利用の点では大仙市の先輩だが、決して良い条件とは言えないなか、保存管理への工夫や、旺盛な普及・調査研究活動を実践していると感じた。

中之条町は博物館と併設である。このような例は県レベルでは三重県立総合博物館がある。一般の方から見ると博物館も文書館も似た施設に思うかもしれないが、実は結構ベクトルは違う。史資料を保存するまでは一緒だが、展示機能中心の博物館に対し、一般への閲覧利用を前提とする文書館は図書館に近い。行政文書の移管保存は、文書主管課との連携が不可欠である。

常陸大宮市も利用実態としては展示の見学者が多く、行政利用はまだ少ないようだが、

しかし形態はどうあれ、まずはこのような施設があることが大事なのだと思う。中之条町の場合は、博物館で文化財保護行政も行っているとのことで、教育委員会・博物館・文書主管課の連携は良好なのだろう。さらに民間企業との連携による電子化を進めているのが特徴で、誘致企業の特性を活かした官民連携が機能している。

おわりに 予算も人も少ない市町村で、いかに資料の保存・活用に力を入れているかを感じた。「トップの意志」と言ってしまうとそれまでだが、そのための下からの積み上げ、実務にあたる担当者の熱意を感じた。ましてや県においてをや、である。

なお、付言すれば、最近の全史料協は公文書保存問題を多く取りあげているが、参加者の顔ぶれを見ると、公文書館職員は別として、相変わらず「箱」がない一般の自治体の文書管理担当課の参加が少ないように見受けられる。身内の話で恐縮だが、青森県でも平成25年に公文書館的機能を持つ組織が情報公開コーナーと併置する形で発足したが、本大会への職員の出席はなかった。やはり、全史料協の活動も歴史資料＝古文書、自分たちの管轄外、と思っているのか気になるところである。これは、会員である我々も「普及啓発」に努めなければならないところである。